

# “自分らしさ”の難しさ

よくこんな声を聞きます。

「自分が何をやりたいのかわからない」

「自分に合っているものって何だろう？」

世の中は“個性”や“自分”を大切にしようという動きになってきています。

その一方で、上述のような「“自分らしさ”ってなんだろう？」という疑問に度々ぶつかることもあるかもしれません。

そんな“自分らしさ”を巡る疑問を考えるヒントになる落語を今回は紹介します。

～時そば～

寒さが目立つようになった季節のある夜、屋台のそば屋で客の男が一杯のそばを注文する。男はやけに調子がいい。的に矢が当たった絵の入っている看板を縁起が良いと誉め、そばが出てくるのが早いと誉め、そばを食っているのか、誉めているのかわからないという調子。続けて、箸を誉めて、どんぶりを誉めて、汁と一口飲むなりまた誉める。さらには麺の細さ、ちくわの厚さなど次々と誉める始末。

このように褒め倒しながら、残ったそばをすすり込み、汁を全部飲んで、さあ勘定となる。そば屋は『十六文いただきます』と言う。

男はそば屋の手のひらに小銭を一枚ずつ、はじめはゆっくり、次第に微妙に早く数えていく。「一つ、二つ、三つ、四つ、五つ、六つ、七つ、八つ・・・今、何刻だい？」

そば屋は『へい、九つで』と答えます。

すると男は、「十、十一、十二、・・・十六」と言っ、小銭を置くとサッと行ってしまった。

これを一部始終ボーッと見ていた野郎がいた。

野郎は、さっきの男が八文まで数えて、そば屋に時間を聞いて「九つ」と言わせ、一文ごまかしたことに気づいたのである。

野郎はその手口にえらく感心し、翌日小銭を用意して、偶然見つけたそば屋で、自分もやってみることにした。

昨夜の男の真似をして「寒いねえ」と言えば、そば屋から「今日はだいぶ暖かで」と返され、看板を誉めようにも丸が描いているだけで誉めようがなく、出てくるまでに時間はかかるし、箸も丼もひどい有様。出汁もしょっぱく、うどんのように太いそば、薄っぺらいちくわ・・・と散々で、昨夜の男のようにはどうしても上手くいかない。  
結局、ひどい代物のそばを食べることも出来ないまま、そば屋に勘定を払うところまでやってきたが・・・。

毎度のことですが、噺のオチは、ぜひ「時そば」を聞いてみてもらえればと思います。

そばをすする音、小銭の数え方など、男と野郎の違いを上手に表現しているところがこの噺の醍醐味です。見よう見まねで“自分のもの”にするということが、いかに難しいかがわかります。

どんなことでも、ちょっとやってみただけでは“自分のもの”にはならないものです。

ほとんどのことは、人がやっていること、誰かが得意としていることを、ちょっと気になるからと始めてみることが多いのではないのでしょうか。

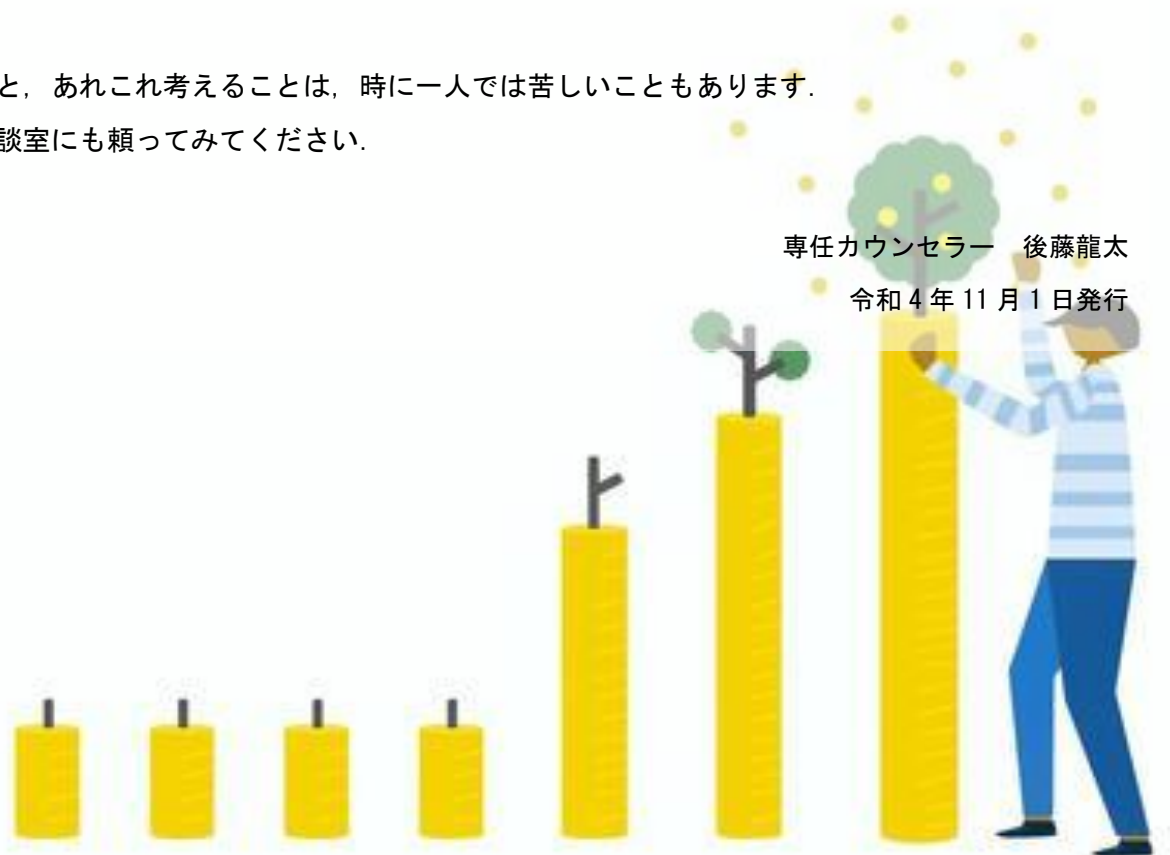
はじめのうちは面白いと思うこともあるでしょうが、続けていくとだんだん面白いだけでなく、うまくいかないこと、さらにはつまらないと思うことさえも出てくるかもしれません。

それでも最初の気になった気持ち、興味・関心を忘れずに、時に聞こえてくる自分の内や外からの「つまらないからやめてしまえ」「そんなものをやっても意味がない」という声に惑わされず、経験や時間をかけてコツコツ身に付けていくと、知らず知らずのうちに“自分らしいもの”になっていき、そして“自分なり”の答えが見つかっていくでしょう。

もちろんあれこれ考えた末に、「時そば」に出てくる野郎のように、ポーっとしてドジなところが“自分らしさ”と受け止めてやっていくこともあります。落語では、そんなのんき者、そそっかしい者、うっかり者などがユーモア溢れるやり取りの中で生き活きと生きていくその様子を教えてください。

ただコツコツやること、あれこれ考えることは、時に一人では苦しいこともあります。

そんな時は、総合相談室にも頼ってみてください。



専任カウンセラー 後藤龍太

令和4年11月1日発行